

研究論文

メランコリーのジェンダーと強制的性愛 ——アセクシュアルの「抹消」に関する理論的考察

松浦優

1 はじめに

これまでのクィア・スタディーズではヘテロノーマティヴィティに対する批判が展開されてきた。しかし異性愛が相対化されるなかで、性愛そのものの相対化については議論が不十分であった。しかし近年英語圏ではアセクシュアルについての研究やアクティヴィズムが展開しつつある。そこでは、正常な人間ならば他者へ性的に惹かれるのが当然だという社会規範を指す概念として「強制的性愛 (compulsory sexuality)」¹ という造語が提起されている (Gupta, 2015)。

このようなアセクシュアルに関する研究の知見には、先行するクィア理論に合致するものもあれば、従来の枠組みを問い直すものもある。本稿ではフロイトの精神分析理論をアセクシュアル研究の観点から批判することを通じて、ジュディス・バトラーの理論を再考する。それによって、アセクシュアルの社会的位置や、強制的性愛に対するアセクシュアルの抵抗の可能性を理論化する。

第2章では、アセクシュアルに関する先行研究をもとに、アセクシュアル研究においてバトラーの理論が参照される理由を論じる。バトラーの主張はアセクシュアル研究の知見と合致する側面も多いが、しかし他方でバトラーによるメランコリーのジェンダーの理論はアセクシュアルの存在を念頭に置いたものではない。それゆえ第3章以降で、バトラーの理論を批判的に検討し、アセクシュアルを理論的に位置づけることを試みる。バトラーはフロイトの理論を批判することで自らの理論を構築しているため、まず第3章ではフロイトの理論のなかにアセクシュアルがどのように位置づけられるか確認する。しかしフロイトの理論で

¹ Compulsory sexuality を「強制的性愛」と訳す理由は、「強制的異性愛」にならった造語であることを示すため、そして「セクシュアリティの強制」が実質的に「他者との性愛の強制」になっているため、という2点である。これについてはのちの注釈でも触れる。

は、アセクシュアルは存在しないことにされている。そこで続く第4章では、どのような論理によってフロイトの理論からアセクシュアルがこぼれ落ちているのか、「一次的ナルシズム」概念に注目しながら検証する。そしてこれらの作業を踏まえたうえで、バトラーのフロイト読解を検討する。フロイトの「一次的ナルシズム」概念は、女性の経験を捨象するものであると同時に、アセクシュアルの存在を否認するものでもある。しかし他方で、フロイトのナルシズム論からは、一次的ナルシズムにも他者性が刻み込まれていることを読み取れる。そしてアセクシュアルに対する否認は、同性愛タブーとは異なる仕方で、身体自我の構成に関わっている。このことを踏まえて、第5章ではバトラーの用いた「排除」「抹消」という語句を転用し、メランコリー論的説明における同性愛の周縁化を「排除」と呼び、一次的ナルシズム論的説明におけるアセクシュアルの周縁化に「抹消」の概念を割り当てる。この作業を通じて、アセクシュアルの社会的位置やアセクシュアルによる抵抗の可能性を論じられるようバトラーの理論を拡張する。そして最後に第6章でこれまでの議論をまとめ、本稿の意義と今後の課題を確認する。

2 アセクシュアルによる強制的性愛への抵抗とジェンダー二元論の相対化

アセクシュアル研究ではバトラーの理論がしばしば参照される。その理由としては、セクシュアリティに関する既存の規範をアセクシュアルが「攪乱」する可能性について論じるため、あるいはジェンダー・アイデンティティと異性愛規範との結びつきを論じるため、ということが挙げられる。

アセクシュアル研究では、現在のセクシュアリティに関する主流的な社会規範を「強制的性愛」と呼んでいる。強制的性愛とは、アドリエヌ・リッチの「強制的異性愛」にならった造語であり、正常な人間であれば、他者へと性的に惹かれるのが当然だという規範を表す言葉である。強制的性愛について、エラ・プジビロは以下のように要約している。

- (1) 他の形式の関係、接触、およびその他の諸活動を超える特権をセックスに付与し、
- (2) 自己形成や自己認識にあたってセクシュアリティを中心化し、
- (3) セックスを健康へと付属させ、
- (4) セックスをカップル関係、愛、

親密性へと結びつける、という4つを通じてセックスとセクシュアリティを特権化するよう機能する技術 (Przybylo 2016: 185)

こうした規範のもとで、アセクシュアルはネガティブな影響を被ることになる。たとえば北米での調査からは、アセクシュアルのことを不完全で人間性を欠いた存在と見なすような「反アセクシュアルな偏見」があると示されている (MacInnis and Hodson, 2012)。またアセクシュアルは、自分自身の性的関心のレベルに満足しているにもかかわらず、他人から病理としてのラベルを貼られることがある²。また親密な関係性とセックスが強固に結びついていることから、しばしば人間関係のなかで困難を経験することもある。あるいは、アセクシュアルだと明言したときに周囲の人から「まだ良い人に出会っていないだけ」あるいは「性的欲望を抑圧しているのだ」などと言われ、自身のセクシュアリティに関する認識を否定される、ということも指摘されている (Gupta, 2017)。

このように、近現代の社会には「セクシュアリティが薄く遍在している」(Przybylo, 2011, p.446)。プジビロはミシェル・フーコーを参照しつつ、強制的性愛は「多様な言説によって構築されている」ものだと説明している (Przybylo, 2011, p.446)。そして「個々の行為者はお互いの行為を真似る」ため、「首尾一貫した身体政治という印象になるとき、いつもわずかに反復の変化が生じる」(Przybylo, 2011, pp.446-447)。このような「反復の変化」を論じるさいにバトラーの理論が援用されるのである³。

これと関連して、誰をアセクシュアルとみなすべきか、という問いを考えると、バトラーの理論が役立つ。アセクシュアルは一般に「性的惹かれを経験しない人」と定義される (The Asexual Visibility and Education Network 2019)。またアセクシュアルの人口を推定する際に、「性的惹かれを誰に対してもまったく感じたことのない」人と操作的に定義されたことがある (Bogaert, 2004)。これらの定義にあるように、しばしばアセクシュアルは、「まったく～ない」という絶対的な欠如として消極的に定義される。しかし後述するように、一口にアセ

² ただしDSM-5では、本人がアセクシュアルであることを苦にしていなければHSDD(性的欲求低下障害)とは診断しない、という基準に変更されている。

³ こうした反復実践の具体例についてはプジビロ(2011)を参照されたい。

クシユアルと言っても、そのなかには多様性がある⁴。そのためアセクシユアルを消極的かつ絶対的に定義することは、アセクシユアルと非アセクシユアルの間に厳密な境界を設定することになり、バトラーの言う「排除」をもたらすことになりかねない。だからこそ、アセクシユアルをアイデンティティのカテゴリーとして考えるときには「二元的な論理にもとづいた排除の政治の瞬間を認識すること、そして単純な受動的に定式化された定義を拒絶すること」が必要とされる (Przybylo, 2011, p.445)。

バトラーの主張するように、「ジェンダー・アイデンティティを理解可能なものにしていく文化のマトリクスにおいては、ある種の『アイデンティティ』は『存在する』ことができない」(Butler, 1990/1999, p.47)。それゆえ、「文化的に理解不能とか、存在不能とされていた可能性を、記述しなおしていくこと」が必要である (Butler, 1990/1999, p.260)。このようなバトラーの議論をもとに、アセクシユアルのコミュニティや言説実践はアセクシユアルを理解可能なものにする活動である、という主張も提起されている (Chasin, 2014)。

アセクシユアル研究でバトラーの理論が言及されるもう1つの理由は、アセクシユアルのなかにはシスジェンダーでない人の割合が高いという可能性が議論されていることである (Brotto et al., 2010)⁵。バトラーはジェンダー二元論と異性愛主義の結びつきを理論化しているため、もしもアセクシユアルにシスジェンダーではない人が多いとすれば、バトラーの理論を傍証することになるかもしれない。アセクシユアル研究においてバトラーが引用される背景には、このような理由がある。

3 フロイト理論におけるアセクシユアルの行方

バトラーはフロイトのテキストなどを検討しながら、ジェンダー・アイデンティティの形成過程において同性愛が「排除」されていることを論じている。しかしこの枠組みでは、アセクシユアルの存在は想定されていない。この背景に

⁴ たとえば、性的惹かれを経験しない人のなかには、性愛に関わる経験が一切ない人だけでなく、恋愛感情を経験する人や、あるいは性的興奮を経験する人も含まれている。

⁵ ただしプロットらの調査自体は、アセクシユアルのジェンダー・アイデンティティを明らかにするためのものではない。この論点については今後さらなる調査が必要である。

は、フロイトの精神分析理論がアセクシュアルの存在を退けていることが挙げられる。

フロイトは、幼児の生活は「没性的」(asexuell) だとする社会的な先入見を手厳しく退けている (Freud, 1917/2012, p.376)。またフロイトは、性対象や性目標の不適切な代理物としてフェティシズムを論じつつ、それが対象の代理物ではなく対象それ自体となった場合を「病的」な倒錯とみなしている (Freud, 1905/2009)。このようにフロイトの理論において、性関係へと結びつかないセクシュアリティは、端的に存在しないか、もしくは単なる代理物とみなされるのである⁶。

このようなフロイト理論を背景としていることから、ジェンダー・アイデンティティに関するバトラーの理論では、アセクシュアルの現れる余地はないように見える。しかしバトラーは、人々の反復実践によって理解可能なアイデンティティの範囲が変動しようという立場を取っている。それゆえ本章ではフロイトのテキストを再読することを通じて、バトラーの理論にアセクシュアルの居場所を開くための準備作業をする。

前述のとおり、フロイトにおいて「没性的」な人間は存在しない。精神分析の枠組みでは、「没性的」であるかのように見える人間は、発達途上の段階か、性目標倒錯か、抑圧によって神経症を患っているか、昇華しているか、といういずれかに位置づけられることになる。この点について、フロイトの『性理論のための三篇』をもとに説明する。

まずフロイトは、幼児にも性欲動が存在すると主張する。フロイトによれば新生児は誕生した時点から性的興奮の萌芽を備えているが、この段階において性欲動は自我欲動（自己保存欲動）に「依託」されている。つまりここでは性欲動が、栄養物の摂取など生命を維持する活動から得られる快感と未分化だとされるのである。性欲動は、自己保存欲動と結びついて発生し、その後の段階で独立す

⁶ ここで、「セクシュアリティの装置」もまた「婚姻の装置」と同様に「性的に結ばれた相手という関係に接合される」ものであるというフーコーの主張を思い出すべきだろう (Foucault, 1976/1986, pp.136-137)。強制的性愛とは、性愛 (sexuality) を強制するものであり、その意味で「性的に結ばれた相手という関係に接合される」ことを強いるものである。この点については松浦 (2020 [近刊]) を参照されたい。

るとされる⁷。

そしてフロイトによれば、自己保存欲動から独立した性欲動は、おしゃぶりに代表される自体性愛として現れる。自体性愛とは、自らの身体の性源域を刺激することによって性欲動を満足させる行動である。このときにはまだ性器が特権的な性源域となっておらず、多形倒錯的であることから、前性器体制と呼ばれる。この前性器体制から徐々に発達が進むことによって、性器領域の優位が確立され、性対象が他者へと移ってゆくとされる。このように、性的対象をもたず、性器的な欲動でもない状態は、未発達な幼児の段階として位置づけられ、自然な発達によって乗り越えられるものとみなされるのである。

次に倒錯について触れておきたい。アセクシュアルに関する議論で倒錯に注目することは意外に思われるかもしれない。しかしフロイトが『性理論のための三篇』を発表していた時期には、固着による性目標倒錯者は性欲動が生まれつき弱いとする説が存在していた。フロイトはこうした見方を否定しつつ、「性欲動の一つの要因、すなわち性器領域」が体質的に弱い場合に、性器領域以外の要因が維持されることで性目標倒錯になるという可能性を考えている（Freud, 1905/2009, p.303）。幼児の多形倒錯を含め、ある種の倒錯は外見上「没性的」なものとみなされうる、ということをごここで確認しておく⁸。

第3に挙げられるのが抑圧である。フロイトの著作では、ヒステリー患者の性格として「性の抑圧」や「性欲動に対する抵抗の増大」「性に関する問題に知的に取り組むことからの逃避」が挙げられる（Freud, 1905/2009, p.210）。つまり一見すると「没性的」にも思える状態は、ここでは精神神経症として位置づけられているのである。

最後に、性欲動が性的ではない目標へと向かうことによって、芸術など社会的に望ましい達成をする場合、「昇華」と呼ばれる。このときリビードから性的な性質が消えている。つまり、リビードは脱性化されるのである。

このように、フロイトの枠組みにおいてアセクシュアルは、(1) 発達途上の未

⁷ フロイトの「依託」については、ジャン・ラブランシュ（1970/2018）による詳細な研究がある。

⁸ アセクシュアルのなかにもフェティシズムやBDSMを愛好する人は存在しており、そのような人々のためのコミュニティもある（The Asexual Sexologist, 2011）。

熟な状態か、(2) 性倒錯の一種か、(3) 性欲動を抑圧し精神神経症を発症している状態か、(4) 特異な社会的達成に至る例外的な人間か、といういずれかで見なされることになる。とりわけ(1)と(3)は、アセクシュアルの人々が向けられる典型的な偏見であると言えるだろう。これに対して、フロイトの「昇華」概念に注目しつつアセクシュアルを精神分析のなかに位置づける試みもある(Kahn, 2014)。しかしアセクシュアルのなかには、一般に性的とされる行為を非性的なものとして意味づけている人もいる(Gupta, 2017)。それゆえフロイトの理論を解釈するさいには、こうしたアセクシュアルの多様な実践を把握できるような枠組みを考える必要がある。

そのために、ここでフロイトの「性対象」と「性目標」という用語について確認する。フロイトは性的な魅力を放つ人物を「性対象」と呼び、性欲動によって引き起こされる行為を「性目標」と呼んでいる。それゆえアセクシュアルの定義をフロイトの用語で言い換えれば、アセクシュアルとは性対象を欠いた人である、ということになる。あくまでもアセクシュアルの定義に関わるのは性対象なのだとすれば、単に性目標を持っているというだけでは、その人がアセクシュアルではないと断定することはできないことになる。

アセクシュアルを精神分析的に捉えるためには、このような観点からフロイトのテキストを読み直すことが有効だろう。まず昇華については、「非性的な自己保存の平面から、性的な欲動が生成されるプロセスである依託とは逆の方向を辿るものとみなせる」と指摘されている(堀川, 2016, p.60)。堀川総司によれば、このような発想の萌芽はフロイトにも見いだされる。フロイトは『性理論のための三篇』のなかで、「ほかの機能から性欲へと通じているような連絡路はすべて、逆方向にたどることもできるにちがいない」と推測している(Freud, 1905/2009, p.264)。このような、依託と逆方向をたどる事例として、フロイトはまず神経症に言及する。すなわち、性的なプロセスの障害が性的ではない仕方でも表出する場合である。これに加えてフロイトは昇華、すなわち性的な原動力が性的でない目標に向かうケースに言及し、性的なプロセスと性的でない身体機能との間には両方向に往来可能な経路があると示唆する。

ところで、ここに双方向性があるのだとすれば、性的でないプロセスによって性的な身体機能が影響することも考えられるのではないだろうか。すなわち、性

的ではない動機から、何らかの性目標に向かうということも想定されるのではないだろうか。実際、アセクシュアルに関する経験的調査から明らかにされているように、非性的な動機から性的活動をするアセクシュアルも存在する (Yule, Brotto, & Gorzalka, 2017)。そうだとすれば、上記の (1) から (4) のすべてにアセクシュアルの存在を見出すことが可能であり、さらに上記以外の「正常な」性生活を営む人々のなかにもアセクシュアルを見出すことがありうるということになる。

4 超自我の形成に先行する一次的ナルシズム？

言い換えれば、フロイトの理論では「没性的」な人間が想定されていないせいで、アセクシュアルがまとまった位置づけを与えられないまま散在しているのである。なぜこのようなことが起きるのか。この問題を考えるためにはフロイトの「一次的ナルシズム」という概念が鍵となる。

フロイトは対象愛が形成される以前に「自我への根源的なりビード備給」が生じていると主張する (Freud, 1914/2010, p.120)。この根源的なりビード備給が一次的ナルシズムである。一次的ナルシズムは正常なものであり、誰にでも存在するものとされる。この一次的ナルシズムこそ、自我理想すなわち超自我が生成する際の源泉とされるのである。フロイトによれば、子どもは発達にとまって幼児的ナルシズムを放棄させられるが、このとき放棄させられた「自我りビード」こそが、自我理想を形成するために用いられるのである。

幼児期におけるこの根源的なナルシズムに対して、「対象備給を取り込むことで生成するナルシズム」が二次的ナルシズムと呼ばれる (Freud, 1914/2010, p.119)。二次的ナルシズムは一次的ナルシズムの上に打ち立てられるものであり、また「自我とエス」では「同一化によって自我へと流れ込んでくるりビード」によって二次的ナルシズムが作り出されると論じられている (Freud, 1923/2007, p.27)。ここから明らかなように、フロイトによるメランコリーの同一化の理論は、二次的ナルシズムに関する現象を論じたものである。

フロイトによれば、メランコリーとは、りビードの備給対象を喪失した人が陥る反応の1つである。メランコリー患者は喪失した対象と同一化し、それを自我に取り込むが、このときりビードが患者自身に向かうことで、患者は強い自己否

定に陥るとされる。バトラーはフロイトのメランコリー論を読解することを通じて、「ジェンダー・アイデンティティをメランコリーの構造と考える」理論を提起する (Butler, 1990/1999, p.131)。文化的な同性愛タブーのもとで、人々はリビドの備給対象としての同性を喪失するが、「もしもメランコリーが体内化をつうじて作動するものならば、否認された同性愛の愛情は、対立的に定義される [引用者注：異性愛主体の] ジェンダー・アイデンティティを養成していくことで保存される」のである (Butler, 1990/1999, p.133)。バトラーはこのような発想のもとで、同性愛の「排除」を理論化する。

ところで、先に述べたフロイト解釈からは、このような同性愛の「排除」は二次的ナルシズムの次元で生じている現象だと考えられる。そして二次的ナルシズムが一次的ナルシズムなしには成立しないというフロイトの主張を受け入れるならば、同性愛の「排除」は一次的ナルシズムを前提としていることになる。言い換えれば、同性愛の「排除」に先立って、アセクシュアルの存在が抹消されていることになるのである。

さらにフロイトは、一次的ナルシズムについて2つの興味深い記述を残している。1つは、一次的ナルシズムと男女それぞれの性対象選択との関連についてである。フロイトによれば、男性の対象選択は「依托型による完全な対象愛」を特徴とする。これは対象への「著しい性的過大評価」を伴うが、この過大評価は「子供の根源的なナルシズム (……) が性対象へと転移された」ものだとされる (Freud, 1914/2010, p.135)。つまりここでは、男性がある対象に性的魅力を感じるの、そこに自分自身を見出すからだとされているのである。これに対して女性の場合には、思春期の成長とともに一次的ナルシズムが昂進するため、「正規の対象愛、すなわち性的過大評価を伴う対象愛」に向かわないとされる (Freud, 1914/2010, p.135)。

この箇所はどのように解釈できるだろうか。まず事実をめぐる記述として読めば、アセクシュアルのコミュニティには男性よりも女性が多い⁹ということを経験分析的な語彙で論じているのだと解釈できるかもしれない。しかしそれに加え

⁹ 適切なサンプリング手法を採用した調査ではないものの、3430人の回答者のうち「女性:51%、女性っぽい:13%、男性:9%、男性っぽい:4%、その他:23%」というウェブ調査もある (Miller, 2012, p.2)。

て、ここにはセクシュアリティという概念装置が男性の経験を中心に編成されているという、ジェンダーの非対称性が潜んでいる¹⁰。つまり、一次的ナルシズムをめぐる議論のなかでは女性の経験が捨象されているのである。このような意味で、アセクシュアルの周縁化は女性の周縁化とも重なる部分があると考えられる。

もう1つは、一次的ナルシズムが見出される過程に関するものである。フロイトは「自分の子供に情愛をもって接する親たちの態度」の観察を通じて、一次的ナルシズムの存在を推測する (Freud, 1914/2010, p.138)。言い換えれば、一次的ナルシズムという概念は子どもの観察から直接導かれたものではなく、大人を観察した結果から事後的に措定されたものなのである。さらにフロイトは、ナルシズムは大人たちが「子供のセクシュアリティを否認しようとする立場」にも関係していると主張する (Freud, 1914/2010, p.138)。つまり一次的ナルシズムという概念は、幼児は「没性的」だという想定を退ける議論に結びつけられているのである。

本稿ではこの箇所について、むしろフロイトこそがアセクシュアルの存在を理論的に否認しているのだ、と解釈したい。ラプランシュらの整理するように、不在は不在として知覚されず、あくまでも「存在の可能性と比較される場合においてのみ」知覚可能となる。それゆえ不在をめぐる否認は「仮定的『知覚的事実』によりも、むしろ人間の現実の最初の基盤をつくる要素に関係する」と考えられる (Laplanche et Pontalis, 1967/1977, p.400)。これを踏まえうえて、アセクシュアルを素朴に「セクシュアリティの不在」と捉えるならば、アセクシュアルの否認とは、セクシュアリティという概念装置を成立させるための「最初の基盤」であると言えるだろう。つまり、セクシュアリティの不在を一次的ナルシズム概念によって否認することで、初めてフロイト的な仕方でもセクシュアリティを論じることが可能になるのである。

さらに、この否認は単なるフロイトの思弁的欠陥であるだけではない。先に述

¹⁰ 赤枝香奈子の指摘するように、セクシュアリティという概念装置そのものが、ジェンダー非対称なものとして構築されている。「セクシュアリティという概念装置の中では、性的欲望の主体として想定され基準となるのは男性であり、女性に性的欲望があったとしても、それはあくまでも二次的な (男性の欲望を模倣した) ものとして扱われるにすぎない」(赤枝, 2011, p.21)。

べたように、一次的ナルシズムは理論的基礎づけを欠いており、根拠の示されないものである。そしてフロイトによれば、「自分の子供に情愛をもって接する親たちの態度」こそ、親たち自身が過去に手放した一次的ナルシズムの再活性化である (Freud, 1914/2010, p.138)。ラブランシュの指摘するように、ここから一次的ナルシズムを「両親の万能感が反転したもの」として位置づけることができる (Laplanche, 1970/2018, p.152)。根源的なナルシズムは両親の欲望を取り入れたものなのであり、その意味で他者の痕跡が根源的に刻み込まれているのである。

このことは両義的な意味を持つ。一方で、アセクシュアルが単にフロイトによって理論的に否認されているだけでなく、両親などの社会的な他者によっても「存在しない」ことにされている、ということを表している。しかし他方で、アセクシュアルなエイジェンシーもまた他者との関係のなかで存在するということでもある。そして後者は、バトラーの言う「攪乱」を可能にするものである。つまりこの両義性とは、バトラーがメランコリーについて論じたことと似た現象が、一次的ナルシズムという別の瞬間においても生じているということなのである¹¹。

このような観点から見れば、一次的ナルシズムによるアセクシュアルの否認という理論は、バトラーの理論と親和的であるように思われる。たとえばバトラーは、「欲望と現実の混同——すなわち、快楽と欲望の原因は身体のある部分、『字義どおりの』ペニスであり、『字義どおりの』膣であるという信仰——は、メランコリックな異性愛症状を特徴づける〈字義どおり化〉という幻想」だと指摘している (Butler, 1990/1999, p.135)。つまり、「解剖学」的な性的性別、「自然なアイデンティティ」としてのジェンダー、「自然な欲望」としての異性愛、という3つが結びついているという幻想を、「〈字義どおり化〉という幻想」と呼んでいるのである。そして性器の差異を重視する「幻想」が、異なる性器同士の接触を重視する「幻想」と一体化しているということは、まさにバトラーの言う「〈字義どおり化〉という幻想」が「性行為 = 異性間の性行為 = 性的性交の幻

¹¹ たとえばバトラーは「幼児も子供も、自分自身に固執し、自分自身として存続するためには、誰かに愛着しなければならない」と述べ、ナルシズムにも根源的に他者性が刻み込まれていることを示唆している (Butler, 1997/2012, p.17)。

想」(Przybylo, 2011, p.454) でもあるということだろう。それゆえ「規範的（性交的、異性愛的）な性行為の形式の反復」(Przybylo, 2011, p.454) もまた、ジェンダー規範の再生産と結びついていると考えられる。

ただしバトラーのフロイト読解では、対象愛が成立したのちに対象を喪失することでメランコリーが生じる、という順序関係が否定される。バトラーによれば、フロイトは自らの「想定」に反して、「メランコリーなしには自我はありえず、自我が被る喪失は構成的である」ということを提示してしまっているのである (Butler, 1997/2012, p.212)。もしそうだとすれば、一次的ナルシズムによるアセクシュアルの否認という理論は、バトラーの理論と対立することになるのではないか。

先に述べたように、一見するとフロイトは、根源的な一次的ナルシズムなしにはメランコリーは生じえないと主張しているように思われる。しかしバトラーは、フロイトによる心的局所論の枠組みそのものが、メランコリーによって可能になっていることを明らかにする。つまり「メランコリーを十分に説明しない内的局所論は、それ自体、このメランコリーの効果 (effect) なのである」(Butler, 1997/2012, p.216)。

こうしたバトラーの理論は、次の2つの点で、アセクシュアルの否認を一次的ナルシズムに位置づける理論と齟齬をきたしうる。1つは、一見するとメランコリーにおける同性愛の「排除」こそが、アセクシュアルの否認を基礎づけているかのように読めるという点である。もしもそうだとすれば、アセクシュアルの周縁化は、単なる同性愛の「排除」に付随する現象と捉えられかねない。そしてもう1つは、バトラーが一次的ナルシズムに刻まれた他者性をメランコリーによるものとして論じており¹²、結果として両者の差異を評価し損ねている点である。

まずは1点目についてだが、確かにバトラーのメランコリー論は、メランコリーの両価性が先に存在し、その後で超自我／自我が産出される、と主張しているように読める。しかし先の引用にある「効果」という語は、実際の時系列的な前後関係ではなく、あくまでも人間の心的機制を理論的に記述しようとする際に

¹² バトラーは「メランコリーの見地からナルシズムを読解している」、という点を示唆してくれた匿名の査読者に感謝したい。

生じる、説明上の論理的な前後関係として捉えるべきである。藤高和輝の指摘しているように、バトラーは同性愛の禁止を「一次的な禁止」と仮定しているわけではない（藤高, 2018, p.228）。むしろバトラーは『ジェンダー・トラブル』で、これまで「一次的」と考えられてきたインセスト・タブーが、実は同性愛タブーという歴史的・社会的な枠組みによって可能になっているということを指摘している。つまりバトラーは、何らかの「一次的」構造を理論化しようとしているわけではなく、一見「一次的」と思われる構造もまた社会的な構築を被っていると主張しているのである。それゆえ、同性愛の禁止はアセクシュアルの否認に先行する「一次的」構造ではない、と考えるのが妥当である。

より大きな問題は、バトラーがナルシズムをメランコリーの観点から論じているという点である。メランコリーは対象喪失によって生じるが、そこで失われるのは、それまで存在していたものである。しかし強制的性愛の文化のもとで、アセクシュアルは単なる欠如や不在とみなされる。つまり「アセクシュアルである」ということは「セクシュアリティがない」という否定的事態とみなされるため、そもそも喪失される「存在」としての地位を付与されないと考えられる。そうであるならば、一次的ナルシズムに刻まれた他者性をメランコリーとして論じることはできない、ということになるだろう。

これを受けて、次に考えるべきは、アセクシュアルであることがいかにして身体領域と関わるのか、という問題である。バトラーの言うメランコリーの同一化は「体内化」であるが、これは喪失した対象を身体表面に保存する現象である。これに対して、一次的ナルシズムに刻まれた他者性をメランコリーとして論じられなくすれば、そこにおける他者性の取り入れは「体内化」ではないということになる。それでは、一次的ナルシズムによって否認されたアセクシュアルは、身体領域と無関係なものとなるのだろうか。

そうではなく、一次的ナルシズムは、メランコリーの同一化とは異なる仕方で身体領域と関わっていると考えられる。ラプランシュは「悲哀とメランコリー」の読解をつうじて、「一次ナルシズムがナルシス的同一化の一次的形態と同一と考えられている」と指摘している（Laplanche, 1970/2018, p.152 傍点原文）。そしてこの同一化は、「皮膚の袋として考えられる形態への同一化」である（Laplanche, 1970/2018, p.156）。つまり一次的ナルシズムにおけるアセクシ

アルの否認は、身体自我を構成するのである。

このような否認は、アセクシュアルか否かを問わずあらゆる人々に作用する。しかしアセクシュアルに対する否認は強制的性愛の文化によってもたらされるものであるため、アセクシュアルと非アセクシュアルでは非対称な仕方で作作用する。まず非アセクシュアルにとっては、身体そのものがアセクシュアルを否認するものとなる。たとえば、性的身体接触は自他の境界を侵犯するものだと言われるが、まさにそのような侵犯（および侵犯の示唆）が、しばしばアセクシュアルを否認する行為となるのである。

他方でアセクシュアルにとって、身体、とりわけ身体表面はアセクシュアルに対する否認を経験する場となる。ラプラランシュが指摘するように、「皮膚は内からと同時に外から知覚され、いわば迂回によって輪郭づけられうる」ものである（Laplanche, 1970/2018, p.157）。「外」からの否認としては、前述の他者身体による境界侵犯が挙げられるほか、内面に隠されている（と想定された）「本当の」セクシュアリティを執拗に詮索するという仕方での否認も挙げられる¹³。さらにこのような詮索は、「自分は本当にアセクシュアルなのだろうか」という懷疑として、アセクシュアル自身が自らに向けることもある。以上のような仕方、アセクシュアルに対する否認は当事者においては「内」からも作用すると考えられる。

このように、一次的ナルシズムとメランコリーは、いずれも身体自我を構成するという点では類似している。しかし両者の差異も重要である。メランコリーは自己処罰という要素を含んでいるが、同時に「政治的な表現に翻訳されうる怒りを含んでいる」（Butler, 1997/2012, p.184）。バトラーが強調するように、メランコリーの攻撃性は政治的運動へと向けなおされる可能性がある。これに対して一次的ナルシズムには自己処罰が含まれておらず、その意味ではメランコリーよりも安全だと思われるかもしれない。しかし攻撃的な力がないということは、メランコリーと比べると強固な政治的エイジェンシーが生じにくいということになるだろう。一次的ナルシズムにおいて否認されたものは、メランコリーのような強烈な禁止を動員するまでもなく、あらかじめ抹消されているのである。強

¹³ このような詮索についてはブジビロ（2011）を参照されたい。

制的性愛の文化において、アセクシュアルはこのような位置に留め置かれると考えられる。

5 反復される「排除」と「抹消」

以上を踏まえ、バトラーの「排除」概念について再考することが必要となる。バトラーによれば、主体が形成され存続するためには、その主体を脅かしているものを「予め排除」しなければならない。たとえば異性愛主体が構築されるためには、同性愛の可能性が主体形成に先立って「排除」されることになる。バトラーのメランコリー論は、この「排除」を理論的に精緻化したものである。

バトラーは「排除」という用語をラカン派精神分析から借用している。ラプランシュらによれば、「排除」とは精神病の源にある事象であり、基本的なシニフィアンを最初から象徴界の外部に放棄していることを表すものである (Laplanche et Pontalis, 1967/1977, p.375)。しかし近年の研究で指摘されているように、厳密に言えばラカンは「排除」概念を3つの異なる意味で用いている (松本, 2015)。本稿で重要となるのは、そのうち第2の排除と第3の排除である¹⁴。

ラカンにおける第2の排除は、〈父の名〉の排除である。〈父の名〉とは、象徴界を統御するシニフィアンのことであり、これが排除された状態は「精神病」と呼ばれる。ラカンは「禁止された領野の接近」を精神病の兆候と位置づけているが、この「禁止された領野」は「象徴界の欠損、穴」とも表現されている (Lacan, 1981/1987, p.262)。この「穴」はいかなる言葉によっても言語化できない「語りえないシニフィアン」であるため、精神病者は「その穴の存在を暗示するような言葉 (シニフィアン) が頭のなかに乱舞する精神自動症や、無意味な言葉が次々と聞こえてくる幻聴が生じる」ようになる (松本, 2015, p.149)。こうした現象をラカンは「縁どりという現象」と名付けている (Lacan, 1981/1987, p.263)。そこでは、排除された当のものは不可視化されているものの、何かは排

¹⁴ 第1の排除は第3の排除に似たものである。しかし第1の排除では、排除された事物そのものが再出現するわけではなく、排除されたものは「意味作用という形で現実界のなかに再出現する」(松本, 2015, p.136)。また第1の排除は精神病に特有のものだが、第3の排除はあらゆる主体を構成するものである。それゆえアセクシュアルの「抹消」を説明するうえでは、第3の排除になぞらえるのが適切だと考えられる。

除されていることを暗示する現象が執拗に発生する。このような状況を表すのが第2の排除である。

これに対してラカンにおける第3の排除は、現実界を構成するものである。ラカンの理論では、現実界とは象徴界の外部であり、言語によって思考することが一切できない領域である。つまり「象徴化不可能なものを外部へと排出するメカニズムによって、はじめて現実界という領域が構成されるようになる」のである（松本, 2015, p.166）。そしてラカンの枠組みにおいて、現実界なしには象徴界は成立しない。それゆえ第3の排除は、精神病か否かを問わずあらゆる主体を構成する前提条件であり、フロイトの言う原抑圧に相当する。この意味での排除は、ラカンの死後に後継者たちによって「一般化排除」として理論化されることになる（松本, 2015, p.342）。そして第3の排除において排除されたものが再出現する場合、排除された事物そのものが幻覚として現れる。

どちらの排除も、言語によって思考できない領域が生じるプロセスを表している。しかし第2の排除は象徴界の内側で生じるのに対し、第3の排除は象徴界の外部を構築するプロセスである。さらに第2の排除では排除されたものを暗示するような言葉があふれ出すのに対し、第3の排除では排除された事物そのものが幻覚として再出現するという違いもある。

このようなラカン派の理論に対して、バトラーは現実界もまた「言説によって『外部』として構築されているものにすぎない」という立場をとる（Butler, 1990/1999, p.145）。バトラーは象徴界と現実界の区別に批判的であることから、ラカンの3つの排除をあまり明確には区別せず、「主体の形成を可能にさせる行動」という意味で「排除」概念を用いている（Butler, 1997/2015, p.214）。しかし本稿では、排除に関する上記の区分をバトラーの理論へと落とし込むことで、強制的性愛の文化におけるアセクシュアルの位置をより明確に記述できるよう、バトラーの枠組みを拡張できると考える。

まずラカン派の言う第2の排除は、近代以降のジェンダー／セクシュアリティ・システムのもとで、とりわけ男性たちがホモセクシュアルをホモソーシャルから執拗に区別しようとする現象と重なる。このような排除は「縁どり」現象を伴うため、一方で禁止されつつも他方でその存在は強く暗示されることになる。それゆえ、そこで禁止されたものは「言説の場を占めることができる

し、そこから逆言説とでもいうべきものを言葉にすることができる」(Butler, 1991/1996, 123)。

これに対して、レズビアンは禁止の対象としてすら認識されないまま、「ひそかに追放」されてしまっている。このような追放を、バトラーは「抹消という計略」と呼んでいる (Butler, 1991/1996, p.133)。抹消については、これまでレズビアンの周縁化との関連で議論されてきたが (堀江, 2015)、この概念はアセクシュアルの周縁化にも適用できると考えられる¹⁵。

ラカンの枠組みにおいて、レズビアンは「絶望した異性愛」に由来するものと見なされており、それゆえ「レズビアンは無性 (asexual) の位置、実際には、セクシュアリティを否定した位置に意味づけられ」ることになる (Butler, 1990/1999, p.105)。ここでレズビアンのセクシュアリティは「どんな象徴的な居場所も占めることができない」ことにされるが (藤高, 2018, p.226)、その理由はレズビアンがセクシュアリティの不在と見なされる点にある。つまり抹消されたものは、象徴界の内部では、端的な不在となるのである。そしてアセクシュアルがフロイトの理論において「不在をめぐる否認」を被っていたことを考えれば、アセクシュアルの周縁化も「抹消」と呼べるだろう。

そしてこの抹消は、ラカン派の言う第3の排除に対応させることができる。第3の排除はフロイトの原抑圧に相当するが、原抑圧は超自我の形成に先立って生じる現象であり、理論的に一次的ナルシズムと近い位置にある。それゆえ「抹消」を一次的ナルシズムによる否認へと対応させることができるだろう¹⁶。

ただしフロイトの原抑圧が一度きりの出来事であるのに対して、バトラーの排除は何度も反復されるものである。これにならい、本稿では抹消もまた繰り返し反復されるものとして位置づける。

これまで一次的ナルシズムについて論じてきたが、この一次的ナルシズムは、後期のフロイト理論では自体性愛と区別されなくなる。そしてラプランシュらによって、自体性愛は「発達の一定時期に位置づけられるのではなく、常に更新されてゆく一つの契機」として位置づけられる (Laplanche et Pontalis,

¹⁵ 「抹消」概念のアセクシュアルへの適用については松浦 (2020 [近刊]) も参照。

¹⁶ ラプランシュらも「否認」と「排除」を結びつけている (Laplanche et Pontalis, 1967/1977, p.400)。

1967/1977, p.195)。言い換えれば、自体性愛は「一定の欲動的活動期（口唇期、肛門期など）の属性ではなくて、これらの活動期のそれぞれにおいて、その早期のものとして、また発達のもっと後の段階ではその成分として、つまり器官快樂として、あらわれるのである」（Laplanche et Pontalis, 1967/1977, p.196）。このように、自体性愛は何度も反復されるものである¹⁷。それゆえ、アセクシュアルは理論のなかで繰り返し否認されると言える。

しかしバトラーに従うならば、アセクシュアルの否認が反復されるということは、その反復のなかにズレが含まれうるということでもある。グプタの説明するように、強制的性愛は、アセクシュアルだけでなく、アセクシュアル以外のセクシュアリティをも産出するシステムである（Gupta, 2015）。それゆえアセクシュアルは強制的性愛の絶対的外部にいるわけでは決してない。アセクシュアルはあくまでも言説実践のなかで外部として構築される「構成的外部」であり、社会的な認識の枠組みのなかで「存在しない」ことにされているのである。

だからこそ、こうした人々を現に「存在する」ものとして記述しなおすことによって、セクシュアリティのシステムを内部から「攪乱」する可能性が開かれる。そのとき、アセクシュアルを単なる不在や欠如として捉えないことが重要となる。「アセクシュアリティはそれ自身を別様に、複数のに、複雑に反復する」¹⁸ ことによって、強制的性愛へと抵抗しうる¹⁹（Przybylo, 2011, p.457, 強調原文）。言い換えれば、セクシュアリティ規範を批判的に考察するうえで、「性行為 = 異性間の性行為 = 性器的性交の幻想」に回収し尽くされないような実践へと注目することが求められるのである。

¹⁷ ラカン派の立場からは、ある種のアセクシュアルを自体性愛の位置から分析することができるかもしれない。ラカンの言うサントームには「各々の主体において異なる、特異的＝単独的な享樂のモード」が刻み込まれているが（松本, 2015, p.373）、現代ラカン派ではこのサントームと「うまくやっていく」ことが肯定されている。こうしたあり方は、ファルス享樂とは異なる自体性愛的な享樂だと見なされる。

¹⁸ こうした複雑化を生じさせるためにも、アセクシュアルや「エース (ase, ace)」といった概念を「セックス、性的実践、そして人間関係におけるセックスの役割などについて無関心であったり反感をいだいたりする人」全般を指す「包括的な用語」として使うことが有益だとされる（Przybylo, 2016, p.182）。

¹⁹ プジビロはこのような抵抗の例として、性的指向と恋愛的指向を区別するといった、新たな概念を作ることによってセクシュアリティへの単一的な理解を拒否する、という実践を挙げている。このほかの事例についてはプジビロ（2011）やグプタ（2017）を参照されたい。

6 終わりに

バトラーの理論はすでにアセクシュアル研究でも参照されているが、バトラー自身がアセクシュアルを念頭に置いた理論を展開したわけではない。それゆえ本稿では、バトラーの精神分析批判をさらに批判的に拡張することで、アセクシュアルの抵抗を理論的に組み込んだ。以下に本稿の議論をまとめておく。

バトラーがフロイトの著作からメランコリー論を展開していることから、本稿でもフロイトの著作を検討した。現在アセクシュアルと呼ばれるような人々は、フロイトの理論のなかではさまざまな位置に散在している。しかしフロイトはすべての主体に一次的ナルシズムを想定することで、セクシュアリティの不在を否認している。また一次的ナルシズムを論じる枠組みでは、アセクシュアルの存在が否認されると同時に、女性の経験も捨象されている。さらにフロイトによれば、一次的ナルシズムは超自我の形成に先行するため、超自我からの自我への叱責であるメランコリーは一次的ナルシズムを前提としていることになる。それゆえ、同性愛の「排除」はアセクシュアルの否認を前提としているように思われる。

これに対してバトラーは、むしろメランコリーこそが超自我／自我という枠組みを可能にしていると主張する。ただしバトラーは超自我／自我をメランコリーによって基礎づけようとしているわけではなく、またアセクシュアルの周縁化が同性愛の排除にもとづいて生じると主張しているわけでもない。しかしバトラーは、一次的ナルシズムに刻まれた他者性をメランコリーとして論じている。たしかに両者には類似点があるものの、一次的ナルシズムによるアセクシュアルの否認は、メランコリーとは異なるものとして捉える方が理論的に望ましいと考えられる。

このことを踏まえて、本稿ではメランコリーによる同性愛の禁止を「排除」、一次的ナルシズムによるアセクシュアルの否認を「抹消」と呼んで区別する。このように排除と抹消を区別することによって、セクシュアル・マイノリティの周縁化が異なる仕方では生じていることを説明できると考えられる。また、この区別はラカン派の理論にもある程度整合しており、精神分析的な観点から「抹消」は原抑圧になぞらえることができる。しかし原抑圧と異なり、バトラーの「排除」や「抹消」は繰り返し反復されるものである。こうした反復のなかに、強制

的性愛に対する抵抗の契機が見出されるだろう。

本稿はアセクシュアルをクィア理論へと書き込むための試論であり、その意味で、本稿で論じきれなかった課題にアプローチする際の足掛かりにもなると考えられる。それゆえ最後に今後の課題と本稿の意義を2点まとめる。

まず、本稿はあくまでもバトラーの理論とアセクシュアルとの関係を模索するものであり、他のクィア理論におけるアセクシュアルの位置づけを論じることができていない。クィア理論のなかにも、たとえばレオ・バルサーニのように、セックスのラディカルな破壊力に重点を置いた理論がある。こうした理論はアセクシュアルを捉えるうえでどのような示唆をもたらすか、あるいは逆にアセクシュアルの観点からこうした理論をどのように解釈できるか。本稿ではバトラーの枠組みにアセクシュアルを位置づけたほか、フロイトやラカンの理論とも関連づけて考察したため、本稿の考察をもとに他の論者との比較を行うことができると考えられる。

また本稿の考察は理論的なものであり、アセクシュアルの人々の実践を明らかにしたものではない。日本ではアセクシュアルに関する経験的な調査がほとんど蓄積されていないため、まずは実際のアセクシュアルの状況を明らかにする必要があるだろう。そしてそのような経験的調査を解釈するときに、本稿で提示したパースペクティブを用いることができるかもしれない。また逆に、調査を通じて本稿の理論が改訂されることもありうる。そのような理論と実践の往復を通じて、アセクシュアルが存在するための場を理論のなかに、そして社会のなかに切り開いていくことが求められる。

References

- The Asexual Sexologist. (2011). Resources for the Asexual & Kinky. Retrieved August 15, 2019, from <https://asexualsexologist.wordpress.com/2011/05/13/resources-for-the-asexual-kinky/>
- The Asexual Visibility and Education Network. (n.d.). Retrieved November 11, 2019, from <https://www.asexuality.org/>
- Bogaert, A. F. (2004). Asexuality: Prevalence and associated factors in a national probability sample. *Journal of Sex Research, 41*(3), 279–287.
- Brotto, L. A., Knudson, G., Inskip, J., Rhodes, K., & Erskine, Y. (2010). Asexuality: A mixed-methods approach. *Archives of Sexual, 39*(3), 599–618.
- Butler, J. (1996). 「模倣とジェンダーへの抵抗」(杉浦悦子, Trans.) [imago] 7(6), pp.116-135 (Original work published 1991).
- Butler, J. (1999). 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』(竹村和子, Trans.). 東京：青土社. (Original work published 1990).
- Butler, J. (2012). 『権力の心的な生—主体化＝服従化に関する諸理論』(佐藤嘉幸, 清水知子, Trans.). 東京：月曜社. (Original work published 1997).
- Butler, J. (2015). 『触発する言葉——言語・権力・行為』(竹村和子, Trans.). 東京：岩波書店. (Original work published 1997).
- Chasin, C. D. (2014). Making Sense in and of the Asexual Community: Navigating Relationships and Identities in a Context of Resistance. *Journal of Community & Applied Social Psychology, 25*(2), 167–180.
- Foucault, M. (1986). 『性の歴史 I 知への意志』(渡辺守章, Trans.). 東京：新潮社. (Original work published 1976).
- Freud, S. (2007). 「自我とエス」(道旻泰三, Trans.). In 『フロイト全集』, vol.18, pp.1-62. 東京：岩波書店. (Original work published 1923).
- Freud, S. (2009). 「性理論のための三篇」(渡邊俊之, Trans.). In 『フロイト全集』, vol.6, pp.163-310. 東京：岩波書店. (Original work published 1905).
- Freud, S. (2010). 「ナルシシズムの導入にむけて」(立木康介, Trans.). In 『フロイト全集』, vol.13, pp.115-151. 東京：岩波書店. (Original work published 1914).
- Freud, S. (2012). 『精神分析入門講義』(高田珠樹, 新宮一成, 須藤訓任, 道旻泰三, Trans.). In 『フロイト全集』, vol.15, 東京：岩波書店. (Original work published 1917).
- Gupta, K. (2015). Compulsory Sexuality: Evaluating an Emerging Concept. *Signs: Journal of Women in Culture and Society, 41*(1), 131–154.
- Gupta, K. (2017). “And Now I’m Just Different, but There’s Nothing Actually Wrong With Me”: Asexual Marginalization and Resistance. *Journal of Homosexuality, 64*(8), 991–1013.
- Kahn, K. (2014). “There’s No Such Thing as a Sexual Relationship”: Asexuality’s Sinthomatics. In K. J. Cerankowski & M. Milks (Eds.), *Asexualities: Feminist and Queer Perspectives* (pp. 55–76). London and New York: Routledge.
- Lacan, J. (1987). 『精神病 上』(小出浩之, 鈴木國文, 川津芳照, 笠原嘉, Trans.). 東京：岩波書店. (Original work published 1981).
- Laplanche, J. (2018). 『精神分析における生と死』(十川幸司, 堀川総司, 佐藤朋子, Trans.). 東

- 京：金剛出版。(Original work published 1970).
- Laplanche, J., & Pontalis, J.-B. (1977). 『精神分析用語辞典』(村上仁ほか, Trans.). 東京：みすず書房。(Original work published 1967).
- MacInnis, C. C., & Hodson, G. (2012). Intergroup bias toward “Group X”: Evidence of prejudice, dehumanization, avoidance, and discrimination against asexuals. *Group Processes & Intergroup Relations*, 15(6), 725–743.
- Miller, T. (2012). *Analysis of the 2011 Asexual Awareness Week Community Census*. Retrieved from <http://www.asexualawarenessweek.com/census/SiggyAnalysis-AAWCensus.pdf>
- Przybylo, E. (2011). Crisis and safety: The asexual in sexsociety. *Sexualities*, 14(4), 444–461.
- Przybylo, E. (2016). Introducing asexuality, unthinking sex. In N. Fischer & S. Seidman (Eds.), *Introducing the new sexuality studies: 3rd edition* (pp. 181–191). London: Routledge.
- Yule, M. A., Brotto, L. A., & Gorzalka, B. B. (2017). Sexual fantasy and masturbation among asexual individuals: An in-depth exploration. *Archives of Sexual Behavior*, 46(1), 311–328.
- 赤枝香奈子. (2011). 『近代日本における女同士の親密な関係』東京：角川学芸出版.
- 藤高和輝. (2018). 『ジュディス・バトラー——生と哲学を賭けた闘い』東京：以文社.
- 堀江有里. (2015). 『レズビアン・アイデンティティーズ』京都：洛北出版.
- 堀川総司. (2016). 『精神分析と昇華——天才論から喪の作業へ』東京：岩崎学術出版社.
- 松浦優. (2020 [近刊]). 「アセクシュアル研究におけるセクシュアルノーマティヴィティ (Sexualnormativity) 概念の理論的意義と日本社会への適用可能性」. 『西日本社会学会年報』, 18.
- 松本卓也. (2015). 『人はみな妄想する——ジャック・ラカンと鑑別診断の思想』東京：青土社.

Abstract

Melancholy Gender and Compulsory Sexuality: Theoretical Considerations on Asexual “Erasure”

Yuu MATSUURA

Judith Butler’s theory of melancholy gender echoes some findings in asexuality studies; however, it does not consider asexual agency. Thus, this article aims to review Butler’s literature from the standpoint of asexuality studies. I argue that Freudian theory denies the possibility of asexuality because of its hypothesis of primary narcissism. Similar to melancholia, primary narcissism has the “trace” of the object. However, Butler overlooks the significant difference between melancholia and primary narcissism. Unlike melancholia, primary narcissism is not marked by the experience of self-beratement; thus, it does not contain any affects that can be converted to political expression. In the system of compulsory sexuality, asexuality can be situated in a similar position. Based on the above points, I refer to the prohibition of homosexuality in melancholia as “foreclosure” and the denial of asexuality in primary narcissism as “erasure.” In this way, Butler’s framework is extended in order to theorize the possibility of resistance in asexuality.

Keywords:

asexual, compulsory sexuality, queer studies, psychoanalysis, sexuality

